

北朝鮮の領導芸術とその目的
—金日成の回顧録『世紀と共に』を素材として—

ご氏名： 崔 穎麗 ご所属： 島根県立大学

キーワード： 北朝鮮 領導芸術 革命正統性の後継

1. はじめに

本論文は、金日成の回顧録『世紀と共に』を素材として、‘広義’の主体思想の一つである領導芸術とその目的を分析する。領導芸術は主体思想理論体系の一つとして人を動かす方法である。

多くの先行研究は、‘狭義’の主体思想の内容における研究は詳しく分析されているが、‘広義’の主体思想の構成部分である革命理論と領導方法における研究は疎外される傾向がある。それで、本論文では金日成の回顧録である『世紀と共に』を第一次資料として、北朝鮮の領導芸術を分析することを試みる。北朝鮮ではこの回顧録について「革命偉業の将来を明らかにしてくれる闘争と人生の教科書」として宣伝され、様々な方法で住民たちに教育及び普及されている。例えば、放送を通じた朗読と解説、各地区・地域の学習の集まりなどがある。中央放送の場合、毎日午前5時15分から35分まで、午後11時30分から50分まで二回にかけ全住民たちを対象にした朗読・解説をし、中学校には「金日成回顧録学習室」を設置し、2週間に一回2時間ずつ『世紀と共に』を習得させている。また、海外での金日成に対する宣伝物としてこの回顧録を英語・中国語・仏語・日本語で翻訳・出版して普及されている¹。

この回顧録は金正日の後継によって、金正日政権に服務させるために目的論的に叙述された面もあり、具体的な歴史状況を復元することは難しいことがある。しかしながら、この回顧録は金日成に続く金正日政権つまり北朝鮮の内在的理念を理解するに欠かせない資料である。李鐘奭は、回顧録『世紀と共に』から見る民族主義とキリスト教に対する友好的な態度は、今後北朝鮮の対南戦略の方向を見越してくれると指摘している²。

金日成の死亡に直面した北朝鮮住民の泣き喚きを単純に北朝鮮のような特殊な体制の中での住民たちの演劇に過ぎないと評価できるのか。また、冷戦の終結、金日成の逝去と伴う「苦難の行軍」から、経済低迷、食料不足、国際孤立など大量な飢餓死も起きたが、脱北者は一部に過ぎ無いことを単に軍事による弾圧だけで説明できるか。現在、多くの北朝鮮以外の外部社会の人は、北朝鮮の全ての文献を多くは政治的な宣伝物に過ぎない資料的価値がないと認める主張が強い。しかし、北朝鮮住民向けに宣伝している第一次資料を分析するのは、北朝鮮政府の宣伝手段、北朝鮮住民の意識を理解するに欠かせない資料でも

¹ <http://www.kplibrary.com/nkterm/read> 2013年8月22日最終アクセス。

² 李鐘奭『新しく書いた現代北韓の理解』歴史批評社 2000年6月、59頁。

ある。ある元放送員であった脱北者の証言によれば「北朝鮮の言論分野は一言でも政治性と関連することを間違ったら、政治犯受容所に行くのを多く目撃しました。一回、ミスを行くと家族全員、あるいは家族3世代まで行くのも目撃しました。しかし、その時、私たちは、金日成と金正日を背信したから当たり前だと思いました³。」このように、北朝鮮で育てられた住民たちにとって金日成、金正日への忠誠は神聖不可侵のものとして受け入れるのは事実である。

さらに、その感化力はただ北朝鮮住民だけに限られていなかった。元韓神大学の教授、檀君学会会長を歴任したキム・サンイル教授は回顧録について「回顧録は精神を明らかにさせ、人間が民族を愛し、愛国・愛族する道はいかに神聖で高貴なことかを教えてくれる。他人を自身より愛し、他人を信頼しながら生きていく共同体の意識—私は金日成周辺の人々は抗日遊撃隊活動を通じてこのような人間像を身に付けたと思う。このよう人間像は、現在北の体制を維持させる原動力だと思う。このような人間像の原型を私は回顧録から読めることができた⁴。」と述べている。

以上のような問題意識に立ちながら、本研究は回顧録で表れている手法を次の点からの分析を試みる。1) ‘亡国の民’として満州地域で闘争してきた金日成の経歴、その中で築かれてきた民族感情を利用とした主体的立場の形成背景及び首領の下に一つの組織された力量に結束しようとする工夫、2) 日本に対する赤裸々の批判と北朝鮮が宣伝してきた共産主義社会に対する宣伝、抗日戦争時期の‘苦難の時期’と現社会主義生活との対比的手法を通じて敵対勢力の造りと内的団結への意図、3) 金正日体制の正統性、内的団結のためにこの回顧録に描かれた‘同志’また‘大衆’人物像を明らかにすることより、北朝鮮人民の模範造り。以上のように三つにわけ指導芸術を分析するのを試み、その目的は北朝鮮の対内外への‘自主’と国内での‘人民への統制’を通じて金正日の後継に正統性を与えることであることを解明する。

2、‘民族使命感’を背負った金日成の成長経歴

金日成の生涯は、「朝鮮の近代歴史で民族の受難が最も暗澹とした1910年代⁵」から始まった。それは、「韓日合併」、「総督制令」により、朝鮮人民は現代版奴隷になり、朝鮮は人間が生きていけない生き地獄だったからである。当時、レーニンの言葉を引用した朝鮮の状況は、「…日本は、全ての新しい発明と純然たるアジア式顧問を結合した前代未聞の野獣性で朝鮮を略奪し、また、略奪するために戦い続けるだろう⁶。」である。このような、動乱の時代に生まれ、不遇な幼い時代を過ごした背景は、金日成の成長に影響を与えざるを得なかった。

³ <http://www.voakorea.com/> 2013年8月29日最終アクセス。

⁴ <http://www.tongilnews.com/>

⁵ 金日成 回顧録『世紀と共に』朝鮮労働出版社 1999年、1-1 1頁。

⁶ 同上、2頁。

動乱の時代に生まれた朝鮮人の一人として金日成は、朝鮮人民と共に運命を共有し、同じ使命感に結束された人民たちの同情を受けるのに良い群衆基盤を持っていた。それ以外に、金日成の成長、革命場所は不断なる‘他郷’から‘他郷’への移り続けでもあった。‘故郷’に特に愛着心のある朝鮮民族にとって、‘祖国’を離れ他国で間借り生活をしなければならなかった‘亡国奴’の生活を早く終え、祖国の光復を祈るのは朝鮮民族の宿願でもあった。朝鮮民族の一人として金日成が幼い時から、革命の道を踏んだのは英雄的な存在である。また、不運の根源としての不敗な封建統治者と残悪な日帝に対する恨みは、その後、‘帝国主義’という敵対勢力向けの国内での団結を呼び起こす一方、国内諸力量との派閥闘争での粛清にも用いた。さらに、‘主体’‘先軍’のような政治用語は登場していなかったが、「他国の軍隊に任せ、この国は誰が守り、世話をするのか」など意識した点では、その後の自立に繋がっただろう。

同時、間島の実態から、朝鮮は朝鮮人によって独立を成すべきであると金日成の父親は信念を固めたという⁷。その後、1917年3月23日、‘朝鮮国民会’を結成し、その目的は、全朝鮮民族が一致団結し、朝鮮人自身の力で国の独立を成し、真の文明国家を立てることである⁸。‘3・1運動’の教訓から、金日成の父親は、ロシアのように民衆革命をすべきだと結論を出し、朝鮮の民族解放運動を民族主義運動から共産主義運動に方向転換すべきだと決心した。共産主義運動をすべきだという思想は、金日成の成長に大きな影響を与えた。共産主義運動の影響を、ロシアあるいは国際社会主義運動からの影響ではなく、父親から影響を受けたと主張により、革命的伝統性と自主を強調する狙いがあっただろう。

以上のような家庭背景を持った金日成が革命に参加したのは、彼に革命的な継承性の付与でもあった。それは、金日成だけではなくその後の金正日、現在は金正恩に至るまで金氏政権の正統性でもあった。

また、藩‘省委’との出会いは朝鮮の‘自主’という問題を意識し始めた。藩‘省委’は満州地方の共産主義者らの中でよく知られている有名な革命家であり、党活動家であった。金日成と彼が最初に論議したのは国際党と国際共産主義運動に関する問題であった。藩の「…朝鮮共産党が解散されたのにインド共産党は解散されなかった理由は、ホーチミンのような優れた人物が国際党にインド代表として存在するからである。しかし、当時、朝鮮共産主義運動隊列には国際党に認められるレベルの傑出した人物も指導核心も無かった。」という答えに対し金日正は大きなショックを受けた。「党の解散原因の基本的な理由を指導者と指導核心の無いことから指摘する藩の話は、党解散の1次的原因を派争だけで探すになれた私に大きなショックを与えた。国際党に認められる世界的な指導者の欠乏、それにより朝鮮共産党の解散を阻止させることはできなかったという、藩の分析は発見的なものであった。⁹」

⁷ 同上、25頁。

⁸ 同上、27頁。

⁹ 『世紀と共に』3-1 82-92頁。

藩との対話内容の真実は確認できないが、同時、運動を指導したソ連及び中共との間で朝鮮人共産主義者たちは、「少数民族」であったために、苦勞を重ねたことである。例えば、‘民生団事件’から自分達の闘争を自ら決定できない金日成らに屈辱感を与え、彼らの民族主義感情を刺激したに違いない。北朝鮮が現在主張しているのと違い、抗日闘争の時期に主体思想が創始されたわけではないが、主体性の重要性を認識したのは抗日闘争の経験にあることは疑いない¹⁰。

3、対比的な手法の引用

金日成の回顧録『世紀と共に』で興味深いのは対比的な手法である。ここでは、日本帝国主義に対する赤裸々の批判と北朝鮮制度に対する賛美との対比、金日成らが抗日闘争時期の‘苦難の時期’と比べた現社会の生活との対比を分析してみる。

「私の生涯は朝鮮の近代歴史で民族受難の悲劇が最も暗澹に重なった1910年代から始まる。…悠久な歴史と豊富な自然資源と秀麗な山川絶景を誇るその領土は、日本帝国の大砲ににじられた¹¹。」

以上のように、国を無くした民族として恨みから始まり、金日成個人として日本に対する憎しみは、監獄で父親との面会があつてから、もっと大きなきっかけとなった。同時の心情を金日成は、「父親の体に残した傷は私として、悪魔のような日本敵国主義の存在を全身で感じさせた¹²。」と述べ、その後の日本帝国主義に対する批判を前面的に展開した。

「敵らは共産党員が一人でもいる村はその村落の住民を全滅した。共産党1名を無くすためには、100名の群衆を殺して良いというのが日本軍警らのスローガンであつた。…延吉ただ一つの県で殺害された人数は1万余名に達し、間島臨時派遣隊の罪をどんな言葉で告発できるのか¹³。…間島大‘討伐’の年で知られている‘庚申年’にも日本軍隊は満州地方で朝鮮人を大量的に虐殺した。…1923年の‘関東大震災’を朝鮮人弾圧の好機会としたやくざらは至る所において日本刀で朝鮮人を次から次へ悲惨に殺した¹⁴。…日本帝国主義者らは1940年代に入ってから‘皇民化’政策を強要しました。…それより酷いのは日本人は、朝鮮人の民族性を無くすために‘皇国臣民の誓詞’の斉唱、日本語の使用、神社参拝、創氏改名などありとあらゆる手段を惜しまなかつたです。…昔は、金剛山に数百年もなつた巨木も多かつたです。しかし、日中戦争後、その巨木も全部採っていきました。あ

10 鐸木 昌之『北朝鮮社会主義と伝統の共鳴』、東京大学出版会、1992年。

11 『世紀と共に』1-1 1頁。

12 『世紀と共に』1-1 32頁。

13 『世紀と共に』3-1 10頁。

14 『世紀と共に』4-1 111頁。

まりにも莫大な財宝を略奪したのでそれを全部計算することができません¹⁵。…他の国の王宮に侵入して王妃を殺害することまで起こした奴らが何をできませんか。日帝は1940年代に、朝鮮社会の全ての部門で過去世紀末に行った王家蹂躪のような悪事を余儀なく敢行しました。朝鮮人は死滅するか、生き残すかという絶体絶命の危機に瀕していました¹⁶。」

以上のように日帝国主義を糾弾することは、さらに現社会の帝国主義への非難にも繋がる。北朝鮮で宣伝しているように、現在北朝鮮が経済的に苦しんでいるのは全て帝国主義のせいである。

「朝鮮革命は創造と革新の発動機の力により、21世紀の大門に至った。21世紀を前に眺める我が党の最も重要に論議される政治的主題は、帝国主義連合による強力な封鎖の中で人民大衆中心の‘我々式社会主義’をいかなる方法でも続けて固守し、輝かせていくのである¹⁷。」

日本帝国主義の残酷性と比べ金日成らの闘争史は、朝鮮民族を救うための英雄的な闘争であり、その過程は愛国、愛族、愛民に溢れた‘愛’に囲まれた涙ぐましい歴史であった。

1926年10月17日、「打倒帝国主義同盟」の結成は、金日成の革命の始まりでもあった。この同盟は、反帝、独立、自主の理念の下で民族解放、階級解放を実現するために社会主義、共産主義を志向する新しい世代の青年らで組織された¹⁸。その後から、金日成は一生を民族の尊厳と自主性を守るために闘った。朝鮮民族を害し、朝鮮の自主権に挑発する奴らを許さなかった¹⁹。

また、抗日戦争の中で金日成らは残酷な日帝とは違い、共産主義道徳性の持ち主で人民たちを無限に愛する‘情’に溢れた優しい人々であった。

「私たちは革命闘争をする過程で古い社会の封建的な人間関係と道徳規範を打破し、新しい共産主義的人間関係と道徳規範を創造し、それを後代らに一つの財として残してくれた。…私たちは同志を得ることから革命を始まり、同志的義理と団結を強化し、人民たちと血縁的な連携を強化する方法で革命を深化させた。現在も昔も同志愛は我が革命の勝敗を左右する重要な生命線である。…その中でも特別な地位を占めるのが領導者と大衆の義理である。領導者は大衆のために服務し、大衆は領導者のために忠誠を尽くすのが領導者と大衆の我々式の共産主義義理である²⁰。」

¹⁵ 『世紀と共に』 8-3 386頁。

¹⁶ 『世紀と共に』 8-3 388頁。

¹⁷ 『世紀と共に』 4-1 139

¹⁸ 『世紀と共に』 1-2 166頁。

¹⁹ 『世紀と共に』 4-1 115頁。

²⁰ 『世紀と共に』 6-2 258-261頁。

このような共産主義道徳のスローガンの下で、金日成らは人民的作風と人民利益に符合する人民的な思考方式を持つために、人民たちの声はもちろん、息、目つき、表情、言い方、身持ちまでも自分の目と耳で直接に捕捉できる人民との直接的な接触を通じて²¹、人民との事業を行っていた。

ここで、一つの小さな例を挙げることができる。

「ある日、私は泊まっていた中国人の農家の老人夫婦を手伝うために氷を掘ろうと斧を持って豆満江にいった。しかし、氷を掘り終わったとき斧を川の中に落とした。どんなに探しても斧は見つからなかった。私は、主人に斧の値段より手厚く支払い、何度も謝った。老人は手伝ってくれただけにありがたいし、革命軍に何もあげないのに斧の値段までもらうことは申し訳ないことだと譲った。しかし、私は隊長として革命軍の規律を違反することになるから、私のためにもそのお金は受けてくれてほしいと懇請した。老人に斧の値段より多く支払ったが、申し訳ない気持ちは消さなかった。それで、1959年春、抗日武装闘争戦跡地踏査団が中国の東北地方に行く時、同時の老人に私の代わりに謝ることを頼んだ²²。」

このように、金日成の人民的作風は自国の人民だけに限らなく、さらに、解放後首相という偉い人物になっても変わらなかった。人間性のない帝国主義に比べ、金日成はどこでも、いつでも人民のために辛苦を惜しまない優しい指導者であった。

もう一つ比較できるのが、‘苦難の行軍’と現在の社会主義生活である。

‘苦難の行軍’は1938年12月から翌年3月末まで、濛江県南排子から長白県北大頂子に至る朝鮮人民革命軍主力部隊の行軍を指す。この行軍は日本軍、満州軍に追跡され、食料の不足が金日成部隊を苦しめる。金日成は‘苦難の行軍’の内容を一言で要約すると、厳酷な自然との闘争、食糧難と疲労との闘争、怖い病魔との闘争、奸悪な敵らとの闘争が縛られたこと、それに苦難を克服するための自分自身との闘争が伴う、始まりから最後まで全ての試練と難関で一貫された²³と言う。

隊員の回想には、乏しい食糧を金日成や呉仲洽がいかにか自分は食べないで、部下に食べさせたとしたか、部下はまた司令官に食べさせようとしたかという話が繰り返し出てきて、これがもっと苦しい点であったことを示している。飛行機に発見されるのを恐れ、火をたかず、馬肉を生で数日間食べ続けたことも書かれている²⁴。

しかし、このような状況を打破できるようになったのは、百折不屈の革命精神と自力更

²¹ 『世紀と共に』 1-3 268頁。

²² 『世紀と共に』 3-1 40頁。

²³ 『世紀と共に』 7-2 151頁。

²⁴ 和田春樹 『金日成と満州抗日戦争』平凡社、201頁。

生、艱苦奮闘の革命精神、革命的楽観主義精神、それに革命的同志愛も欠かせない要因²⁵であったという。また、一つの要因は金日成らに対する人民たちの愛と支援であった²⁶。

この時期と比べ、現在の北朝鮮は仁徳政治を施す党の領導の下で、万民が一つの大家庭の中で和睦に暮らしている²⁷。しかしながら、北朝鮮が直面した困難を次のように解釈し、教養されている。

「私たちは困難な環境で社会主義建設を行っています。私たちの革命は依然として艱苦な行軍の道が続いています。だから今も苦難の行軍は続いているといえます。昔は、数十万の日本軍が私らを包囲し、追撃しましたが、現在はそれとは比べもできない強大で暴悪な帝国主義勢力がわが国を圧殺しようとしています。実に、私たちは戦争時期と同じ状況で暮らしています。このような状況で私たちが生ける道は、抗日革命先烈らが苦難の行軍の時期に発揮した白頭の革命精神をそのまま実生活に徹底に具現することです²⁸。」

というのは、現在はどんなに苦しくても昔に比べたら何でもないことであるから革命精神を発揮して最後まで戦うべきであることだ。また、現在も苦しい状況が続けるのは事実であるが、それは帝国主義のせいである。しかしながら、少なくとも国は存在し、また国を守るために必死に闘争しなければならないことだ。なぜなら、国を失う人民は昔の苦しい亡国奴の歴史を繰り返すからである。

「亡国は瞬間で復国は千年だということは、抗日革命 20 年の路程を歩きながら私が得た重要な教訓です。失うのは簡単であるが再び得るのが難しいのが祖国です。…インドは英国の植民地から 200 年ぶりに独立したのはよく知られている事実です。フィリピンとインドネシアは 300 年、アルジェリアは 130 余年、スリランカは 150 余年、ベトナムはおよそ 100 年ぶりに各自に独立を成就したので、亡国の対価はいかに高いですか。だから、私は今も若者たちに祖国を失うと生きても死んだ命と同じだ、亡国奴になりたくなかったら祖国を良く守れ、国を失った悲しきで泣き喚く前に、祖国をもっと富強にし、瓦一つでも多く拾って城塞を高く積んでといます²⁹。」

4、北朝鮮の望む人物像

「朝鮮民族のように情に笑い、情に泣く民族がこのようの中にまたあるか。だから、昔の鬼は経に弱い、人間は情に弱い³⁰。」とこの回顧録で重視しているのは人間的な‘情’で

25 『世紀と共に』 7-2 179 頁。

26 『世紀と共に』 7-2 180 頁。

27 『世紀と共に』 7-2 199 頁。

28 『世紀と共に』 7-2 181 頁。

29 『世紀と共に』 8-3 489 頁。

30 『世紀と共に』 3-3 354 頁。

ある。人間の様々な‘愛’の中で北朝鮮で最も高い地位に置くのが‘革命的同志の愛’のである。

「世の中には親子の愛、夫婦の愛、兄弟の愛、友人の愛など様々な愛があるが、その中で一番重要なのは革命的同志の愛である。真の同志的愛は真の意味での革命の体験が無くては味わえないことで、銃弾が飛び込む戦闘場で生死を共にしたこと無くては感じられない愛である。昔、我と同志らは何日間も水だけ飲みながら血戦する最悪の状況でも、雪の中で凍った山の実でも見つかったらまず同志の口に入れた。³¹」

‘革命的同志の愛’は金日成たち抗日戦争の‘苦難の行軍’時期、革命を勝利へ導いた重要な要因であった。のみならず、現在の北朝鮮でも‘革命的同志の愛’の位相は相変わらず存在である。金正日は、2004年4月7日、朝鮮労働党中央委員会幹部らとの談話で「革命的同志の愛は一心団結の基礎であり、我が革命の原動力である」と主題で述べた。この談話で金正日は、金亨稷と金日成の関係も、金日成と金正日の関係は親子関係を越えた革命的同志関係で、それは人類の‘愛’の頂点だと述べている³²。

5. 終わりに

ここまで、三つに分け回顧録から見る領導芸術の手法とその目的について分析してみた。金日成の回顧録は北朝鮮では革命伝統を最も良く表す一つの文化作品とも言える。金日成は、「革命伝統を主題とした文学芸術作品は、人民たちを党と革命に無限に忠実させるように教養し、彼らを革命闘争にもっと元気良く呼びかける重要な作用をします³³。」と述べたように、その目的は明らかである。さらに、回顧録では金日成が恩人らに対する思い出を述べる手法で‘人間的な愛’を描いている。一方、解放後の恩返しを通じて良心的な領導者を造っただけではなく、後書きにその作業はほぼ金正日によって進んでいることだと金正日の後継を支えている。

北朝鮮で育てられた住民たちにとって、はじめのところで脱北者の述べたとおり住民たちを教養するのに確かに効果を発揮した。しかし、近年に入って北朝鮮でも密輸など様々なルートを通じて外部の情報が流されている。全人民から領導者への忠誠を望むに対し、領導者から人民への‘愛’はごく少ない人民に限って与える状況はいつまで続けるだろうか。

³¹ 『世紀と共に』4・2 267頁。

³² 金正日「革命的同志の愛は一心団結の基礎であり、我が革命の原動力である」朝鮮・外文出版社・平壤2010年、2-11頁。

³³ 金日成『金日成著作集』朝鮮労働党出版社、458頁。